

ロータリーと父 米山梅吉

慶応義塾大学名誉教授

米 山 桂 三

東京南ロータリークラブ



私のロータリー歴は10年足らずでしかありませんし、また私は特にロータリーの歴史を詳しく研究したこともありませんので、本日のロータリー週間のスピーカーとしてはまことに不適任であると思うのでありますが、大滝プログラム委員長から、何かロータリーと父との関係についてでも話をしてみてもどうかというお誘いを受けましたので、甚だ潜越ながらこの壇に登った次第であります。

さて、私はロータリーの歴史は研究していないと申し上げたのでありますが、一応ロータリーについての私見を述べさせていただくことをお許し願えるならば、私はロータリー運動というものとは社会経済史的に見て、それは資本主義の発達という歴史的必然と資本主義の欠陥を救おうとする人物の出現という歴史的偶然との交錯したところで生まれた運動であると考えているものであることをお断りしておきたいと思えます。

ご承知の通りアメリカでは1880年代から今世紀の初期までに資本主義経済が、独占資本主義の段階に到達しつつありました。そのために資本主義の欠陥もあらわれて、1886年には「資本」に対抗しようとする労働者の組織AFL（American Federation of Labor）などが結成されて、ようやく労資の対立、抗争も激しくなって参りました。

他方、政府も独占資本の無節操を抑制するためにいろいろな労働者保護法や、1890年の“Sherman Anti-Trust Act”（アメリカ最初の独占禁止法）を制定せざるをえなかったわけであります。

こうした事態の下では、当時としては健全なる中産階級を地盤に労資協調主義や社会改良思想が生まれてくるのは蓋し当然なことでありまして、その代表的な人物として、弁護士であるJohn Peter Altgeld（後のイリノイ州知事）の名などを挙げるのであります。

ところでロータリーの創始者 Paul Harris も弁護士としてまさに当時の

アメリカの健全なる中産階級の一員であつたのでありますが、当時はようやく新移民の圧力も強くなってきていた時であつただけに、Harris がアメリカ発祥の地 New England 地方出身の家柄の人であつたことから彼の思想を一層健全なものとしていたと考えられます。

この Paul Harris が親しい友人数名（3名）と語りつて何か社会のためになるような仕事のできる集りを始めようとしたのが、ロータリーの誕生となつたのでありますが、丁度それがアメリカ初期資本主義最盛期の 1905 年であつたことは興味あることであります。

かくて歴史的必然としてのアメリカ資本主義の発達の中に Paul Harris という人物の偶然的出現がロータリーの誕生として実を結んだのだと考えられるのであります。もっとも少し後にアメリカ独占資本主義のシンボルといわれる、1907 年設立の U. S. Steel の社長 Schwab 氏が Chicago R. C. の会員となっておりますが、当時のアメリカ労資協調主義のまた別の一面を物語る事実として興味があります。

さて、このアメリカでのロータリーの誕生から 15 年遅れて日本へロータリーが導入されたのであります。丁度その頃日本は第一次世界大戦を挟んでわが国の資本主義が大いに延びつつあつた時でありまして、1910 年代には産業の各分野に大企業が出揃いはじめまして日本経済も独占資本主義の様相を呈しはじめ、ようやく資本主義の欠陥もあらわれはじめていたのであります。

しかし、わが国では当時過激な社会主義思想は強く弾圧されていたので 1912 年（大正元年）には、鈴木文治を中心に「資本」と「労働」との協調を称える友愛会（後の日本労働総同盟）が結成され、ようやくわが国の労働運動はすべり出しましたが、政府も 1915 年（大正 5 年）には工場法施工令を發布し労働者の保護に乗り出さざるをえなかつたほどであります。

ところが 1917 年（大正 6 年）のインフレに続いて米騒動が起きたり労働争

議が頻発してようやく「労働」と「資本」との対立が深まり階級斗争が激化して参ったのであります。こうした事態を憂えた人々の間では労資協調主義や社会改良思想が強く支持されていたのであります。父はたまたま1887年～1895年の8年間、丁度アメリカで労資協調主義や社会改良思想が盛んであった頃にアメリカに留学していたこともありまして、多分その時にこうした思想を身につけたことは十分想像されうることです。父の和歌に“その中を富める貧しきへだたつつ流るる溝の浅かれとこそ”という一首があることからそのことは推測されるのであります。

また父は地主の相続人として自らは農民から小作料を徴収する立場にありましたが、早魃の時でも小作料納入のために農作物を作らなければならなかった小作人同志がしばしば水争いのため殺傷事件をさえ起こすことのあるのを憂えて、“いささいもなく漫々の青田かな”という俳句を残しております。これらの和歌や俳句から父の心の奥底にはいつも労資協調主義や社会改良の思想が根強くあったことを思わせます。こうしたわけで父が1918年(大正7年)に渡米したとき、はじめて社会改良、社会奉仕をモットーとするロータリーの運動を知って強く心を打たれたことは当然なことでありましょう。

さて、こうした父の思想の背景を知るには父の生い立ちを辿ってみるのが一番解り易い方法であると思われませんが、時間もありませんのでそのごくあらましを述べることにいたします。

父は日本が封建制を打ち破り、近代国家建設の第一歩を踏み出した明治元年(1868年)に江戸に出仕していた一番士(武家)の参男として東京に生まれました。しかし父は小学生のとき、静岡県三島の在の大地主の家に養子として迎えられ、当時ほんの5才であった一人娘(私の母)の婿となることが約束されました。そして父はそこから中学校(沼津中学)をおわるまで学校へ通いました。父は中学在学中東京から伝えられて来る中央の激しい動きに刺戟されて大いに理

想主義的な革新思想に染まりまして、遂には大地主の相続人となることを潔しとしないで16才のとき養家を飛び出してしまいます。今日でいう家出少年であります。

青雲の志を抱いて東京へ、そして19才のときには単身日本を飛び出してアメリカへ渡ります。それが1887年(明治20年)のことでありました。この間養父の怒りは当然のことで東京での3年間、そしてアメリカでの8年間は養父からの財的援助も断たれました父は苦学生として勉学を続けたのであります。そして1895年(明治28年)日清戦争も終り日本の近代化が一応達成されて日本の資本主義の発達もどうやらその緒についたときに帰国したのであります。

帰国の翌年父は三井銀行に入社するのですが、日本資本主義発達の波に乗って父は出世街道をばく進する幸運に恵まれたのであります。もともとこの頃には21才にもなりました母との間に愛情物語的一幕もあって養父との折合いもつくことになりました。

しかし、この間にも少年時代に染まった理想主義や苦学生時代の苦い経験、或はアメリカ留学時代の教育を忘れなかったためか、父の理想主義的な社会改良思想は消えていなかったようであります。

そうしたわけで、今や富める資本家階級の一員となった父にとってロータリーの奉仕の精神はまさに彼に彼の思想の安住の場所を与えたようであります(もともとマルキストに言わせれば、それはブルジョアの逃避の場所ということになるでしょうが)。

こうして父はロータリーの仕事にも専念したらしいのですが、この頃の父はどうか余り融通のきかないロータリアンであつたらしく、ある例会のとき会長として次週の例会は祝祭日に当るので休会にするとお断わりしたところ、出席会員から喜びの拍手がわいたのを見ると、いきなり強い語調で立派な会員の方々をたしなめたという、父の口から聞いた伝説ならざる逸話が残っているのであります。

それはとにかくとして、この頃、厳密には1921年から1926、7年までの期間に父が私生活で直面した現実には厳しい試練の連続でありました。すなわちこの数年間に父は2人の息子と養父とをたて続けた失いましてその悲しみを癒すためか、一時は何日も禅寺で過すことがありました。しかし父はこうした精神的挫折から自らを救おうと努力したためか、1924年(大正13年)には三井銀行を辞して三井信託の設立に専念しはじめたのであります。父は官利金融機関でも何等かの形でその利潤を社会に還元すべきだと考えて、新しく制定されました信託業法の下で預金者の財産相続や財産管理等の業務をサービスとする日本で最初の信託会社を創立したのであります。

こうして1929年(昭和4年)頃には父は仕事の面でも精神面でも一応の安定感を味いはじめ、丁度私が大学を出て大学助手に就任したのを機に相たずさえて海外旅行に出かけることになりました。この旅の第一の目的地はその時Rotary International Conventionの開催地、TexasのDallasでありました。この頃には父はロータリーの活動もやや心の余裕をもって眺めることができていたらしく余り多くないロータリー関係の和歌に次の二首があります。それはDallasで歌われたものでありますが、“奉仕てふ心めでたき純絹ひたきぬに よそまりそめたる国の四十余の旗”ともう一首は“外国の種はもかくは栄えきて 咲き出ずる花は神ぞ見るらむ”というものであります。

しかし、父の心の安らぎも5.15事件(1932年)、2.26事件(1936年)という相次ぐ日本の政治的擾乱のために再びかき乱されることになりました。こうしてどうやら当時の日本に希望を失いかけた父はこの頃に一切の公職から退きまして、1937年(昭和12年)には私財を投げ出して青山学院の中に小学校を設立することで心の救いを求めようとしたのであります。

この学校の教育方針は社会のためになるような人間を作る児童の教育ということでありましたが、当時ようやく教育、特に小学校教育に対する政府や軍部の国

家主義的干渉が激しくなって参りましたので、校長としての父は大変苦々しく思っていたようであります。

丁度こんなとき、1940年(昭和15年)遂にロータリーも解散を余儀なくされたので父は再度激しい精神的坐折感にさいなまれることになりました。元来父は大変健康に恵まれた人でありましたが、こうした相次ぐショックのためかこの頃からとかく健康が勝れなくなりまして、そんな状態のまま1941年(昭和16年)の太平洋戦争の勃発という最悪の事態を迎えたのであります。

ところで父は1938年(昭和13年)以来、貴族院議員に勅選されていたのでありますが、この無謀な戦争に対する父の消極的、レジスタンスのつもりであったのか、とにかく病気を理由にとうとう大政翼賛会に正式には加入しなかったのであります。ために青山の家には私服の刑事や憲兵が出入りしていたことことあげを私は憶えております。当時の父の和歌に、“心にはおもひありても言はずでことあげすごしし人の罪はも”という一首がありますが、これが多分父の消極的レジスタンスの気持を歌に托したものであろうと推測されるのであります。しかし父はポール・ハリスの「ロータリーの理想と友愛」を翻訳したとき(昭和11年)、ハリスがこの本の中で、よき国際人はまずよき愛国者でなければならぬといっている箇所に特に強い共感をおぼえたほどの筋金入りの愛国者でもあったのであります。そのためにもこそ国を救ふような無謀な戦争には反対していたわけでありましたので、病床で敗戦の報を耳にしたときの父の和歌には“国民の誰かは泣かぬものあらくいたみむ、昭和二十とせ八月十五はつきもちの日”という一首があるのであります。

こうして父は1945年(昭和20年)の終戦国会には何か期するところがあつてか、病軀を押して登院したのであります。院内で倒れ、そのまま郷里に運ばれて(東京の家は戦災で焼かれていましたので)再起することのない病床の人となってしまったのであります。翌年亡くなりました父の枕もとに書き残されてありました辞世の歌は、“老いかつ病み なやめる身は吾が国の 新しき歴史み

まもりてあらむ”というものでありました。

さて、父が現在墓場から見守っているであろう日本の新しい歴史は最早労資協調や社会改良の時代ではなく、隠然とした階級対立をはらみながら、表面は多数のものの生活が豊かになりつつある大衆社会であり、そしてその中で過激思想や革新思想や福祉思想が入乱れているといった時代へと大きく変わってしまいました。

しかし、父は父なりに父の時代を生き抜き、息子の私の口から申すのは口はばつたいことでありますが、父なりに日本社会への貢献を果たすと申してもよいであります。ロータリーの設立などはその一つであったと申してもよいであります。

特に資本主義の欠陥を意識していた父（もちろん資本主義を否定するわけではありませんが）その父は、丁度 U. S. Steel の社長で Chicago R. C. の会員であった Schwab 氏の例に見たように、当時の財界産業界の指導的な方々で思いを同じくする何人かと語り合っ て Rotary を結成したわけで、日本のロータリーも日本の資本主義発達史上何等かの役割を果たしたものと申してもよからうかと存じます。

ところで東京ロータリークラブは昨年その創立 50 周年を記念して、「東京ロータリークラブ 50 年のあゆみ」を刊行しておりますが、それは同じ東京ロータリークラブが昭和 30 年（1955 年）に刊行された「わがクラブの歴史」を鋭く批判したものであります。

これによりますと、昭和 30 年版の「わがクラブの歴史」は、米山を伝説をもとに偶像化してしまっていると強い語調で非難しながら、当時 Dallas のロータリアンであった福島善三次氏こそはロータリーを日本へ橋渡したロータリーの導入者であって、米山は日本におけるロータリーの設立者であり、初代会長であるが、創始者ではないというわけであります。この限りでは私には全く関係のないことでありますが、そこには創始者だの、創設者だの、伝説だの、偶像だのと

いった言葉が入りまじって何か解ったような解らないような話であります。

しかし、私はお蔭様で今や伝説や偶像の子ではなく人間の子にして頂いたことを大変嬉しく思っております。もっともここ東京南クラブでは私は最初から人間扱いをして頂いております上に、本日は当クラブが私に人間米山梅吉について語る機会を与えられましたことを深く感謝して私のお話を終りたいと思います。

(1972・2・24)

(瀬味 記)